

田中隆昭著『交流する平安朝文学』

鈴木 日出男

本書「交流する平安朝文学」は、思いがけなくも二〇〇四年九月四日に逝去された田中隆昭氏の、七十歳余にわたる生涯の最後の論著となった。死を溯ること半歳にも足らぬ三月末、勉誠出版から出された五三三頁に及ぶ大冊である。

全体が次のように五章仕立てになっているが（一）内の数字は、収められた論文数、その論文数からもわかるように、内容はほとんど「源氏物語」に関わっている。

第一章 序説（一）

第二章 渤海使と遣唐使（一）

第三章 菅原道真（二）

第四章 「宇津保物語」と国際交流（二）

第五章 「源氏物語」と国際交流（18）

付録 北京日本事情（一）

本書の書名に即していえば、「源氏物語」を頂点として形成されていく平安朝の文学がいかに形成されていくかを、中国大陸や朝鮮半島の文化をどのように摂取していたかという国際的な交流の過程を通して、具体的に考えようとする意図によっている。

また、本書の要所要所には、諸氏による英語・中国語・韓国語

の翻訳や要旨が添えられている。これは、現今の「源氏物語」研究がにわかに国際的な広がりを見せるようになった情況への配慮からと思われる。というよりも、後述するように田中氏は、東アジア諸国における平安朝文学の研究交流を積極的に推進してきた、かけがえのない研究者であった。

本書のはじめの第一―四章は、平安朝文学が形成されるのに、遣唐使と渤海使による文化交流がいかに重要な働きをなしたかを、一般的な広がりを含めて論じたものである。ここでは、菅原道真の詩文や「宇津保物語」の時空をも、その文化交流の側面から具体的な問題としているが、いずれもその地点から「源氏物語」の問題へと展開させていく。

とりわけ注目されるのは、道真の事蹟と伝承が光源氏の物語とどう結びついていくか、の問題である。たとえば桐壺巻、右大弁という人物が幼い源氏を高麗の相人のもとへ伴い、その高麗人と感動的な詩を作り交したという話。ここでは、その右大弁の存在には、「菅家文章」にとどめられている詩作を通して、いかにも道真らしい風姿が見てとれるとする。

また次のような話。須磨、瀧橋巻あたりで、死後の桐壺院が地獄に堕ちて罪を償っているとして、その故院の霊魂が流離の源氏を救うことになり、しかもそれに応ずるかのように帰京後の源氏が手厚い法要をもって霊界の故院を救済することになる、と語られている。これについては古注釈以来、道真追放を結果させたために地獄に堕ちた醍醐天皇に、日藏上人がその地獄でめぐり遭って救済するという伝承を、重ねて読むのが通行の理解となつてい

る。本書では、この理解を支持することはもちろん、さらに道真伝承の数々を大成した後世の『北野文叢』の一つ「日藏夢記」との共通性を見出し、そこにいかにも『源氏物語』らしい特性をとらえようとする。すなわち、物語に故桐壺院の靈魂を呼び起こすべく取りこんだ地獄めぐりの伝承じたいが、じつは日本のならざる、中国の説話、志怪・伝奇をその原形としているとみられるところから、この『源氏物語』は、中国的な発想をも媒介として、現実の歴史とはまた別の、異界という感覚をもとりこむことができたと言っている。

この故桐壺院の靈魂と道真との関連を分析する叙述のなかで、著者は『源氏物語』の本質にふれて、次のように記している。

『源氏物語』は現実が存在した日本の王朝の歴史とは異なるもう一つのありえたかも知れない歴史をかたる。実在した歴史を強く意識し、その史実をさまざまな形でふまえながら、もう一つの歴史をいかにも過去に実際あつたかのように語る。

この『源氏』観は、本書を貫いているばかりでなく、前著『源氏物語 歴史と虚構』(一九九三年刊 勉誠社)以来、田中氏の主張として一貫してきたのである。この考え方は、歴史事実と物語虚構の関係、すなわち物語にとりこまれる歴史上の事実と、その物語に内在する歴史性とは、物語作品としてどのように関連づけられるかを問うことになる。したがってここでは、中世以来のいわゆる延喜天曆准拠説が重々しく顧みられても当然なのであろう。道真の伝承が有効に引用されていると重視するのも、物語の桐壺帝

に、道真を追放する結果になった醍醐帝の存在が重ねられているとみられるからである。とはいえ、田中氏の主張は、准拠説そのままに終始するのではなく、そこに中国的なるものを介在させることによつて、あくまでも歴史事実ともう一つの内的歴史の関連性を明らかにしようとする点にある。それが、『源氏物語』の本質的なくみということになるのであろう。

*

第五章にはあらためて『源氏』論の数々が収められているが、その幾つかを具体的にとりあげよう。

まず第一に、藤壺の宮をめぐる物語がどのように長編的な展開を遂げていくか、という問題。そもそもこの物語が『長恨歌』『長恨歌伝』などの影響下に開始しているとして、ここでもその中国的なるものとの関連を特に重視している。それによれば、こうである。中国の伝奇的な作品じたいはいずれも短編的ではあるが、それにもかかわらず、玄宗の求めた楊貴妃の靈魂に対応するものとして、物語では亡き更衣に酷似する藤壺の宮や更衣の忘れ形見の源氏を登場させ、それによつてその身代りのような二人が宮廷社会に生きつづけていくところに、この物語の長編性の特徴があるとする。すなわち、楊貴妃の靈魂が一度見出されれば、それで物語が終始せざるをえないのに、現世にとどまる右の身代りの二人が、短編小説である唐代伝奇を超えて長編物語への道を拓かせることになった、というのである。

その身代りの二人の存在そのものは、中国ならざる、この物語の独自性にほかならないが、その後の二人の物語には再び中国的

なるものがとりこまれてくる。二人が密通して不義の子が誕生し、その子が後に冷泉帝として即位するという話である。古來、その冷泉帝・源氏・藤壺の宮の關係が、「史記」の秦始皇帝・呂不韋・母太后の關係に照応しているとみられてきた。本書では特に、真相を知った冷泉帝の苦惱を語る薄雲卷の、「唐土には顕はれても忍びても乱りがはしき事いと多かりけり。日本にはさらに御覽じ得る所なし。たとひあらんにても、かやうに忍びたらむ事をば、いかでか伝へ知るやうあらんとする」などを厳密に分析するところから、この秘密の事件は、「日本社会の実情にあうべく歴史の裏に隠された事件として語られているのだとする。ここでも、現実の王朝史と物語の虚構的な王朝史を交錯させる、この物語の独自の語り方が考えられている。

田中氏の目ざすところは右のように、史実に即した准拠説そのものでもなければ、漢籍の引用そのものでもない。後者の漢籍引用に關していえば、あくまでもそれを根拠とする物語としての想像力の展開を見据えようとするのである。たとえば、古注釈以來「史記」「尚書」などの周公旦によるとみられてきた光源氏の流離と活躍の物語。とりわけ「史記」「魯周公世家」が物語に一貫しているのとみるところから、さらに宇多法皇から子の醍醐帝に対する「寛平御遺誡」をも援用しながら、物語の桐壺院の意思と遺言を導き出すべく、明石巻に故桐壺院の靈魂を出現させて光源氏救済を果たさせたのだというのである。また須磨巻以後、源氏の父桐壺院に対する孝心はもちろん、朱雀帝までがそれと同様の孝心を強めるといふのも、「魯周公世家」における周公の孝心に対

応しているからだとする。さらに、後に出生の真相を知った冷泉帝が父源氏への孝心を強くだくといふのも、周公の孝心の倫理によると説いている。また前記した道真の傳承の、父宇多法皇に対する醍醐帝の不孝とそれゆえの墮地獄という話も、「寛平御遺誡」の発想とも照応して、ここにとりこめられたということであろう。こうした解し方によって、確かに、漢籍の引用を根拠に物語的な想像力がはばたくことができるという、この物語のすぐれた語り口が鮮明になってくるのである。

本書では右の長編的な人物に限らず、物語叙述の随所に、漢籍とのじつに多様な接点のあることを教えてくれる。物語の初期の短編的な人物たちの造型にも、さりげない引用のあることが指摘されている。いわく、「帚木卷の雨夜の品定めに見られる三史五経や列女伝など漢籍に基づいた女性観の表明を受けて語られる空蟬の物語に貞女・賢女の姿が意識的に重ねられていることは考えてよいであろう。藤式部丞の語る賢女の物語がみごとにパロディ化されているように、空蟬の物語も中国の貞女伝がすつかり形を換えて、心ならずも密通をってしまった人妻のなお強固な意志をもちつづけながらかすかにゆらめく心のひだをとらえ、なお、その後の生きざまに貞女の面影がくつきりと残っている」とする。またその中国の列女伝のなかには醜女がじつは賢女であったという型があり、それが末摘花巻から蓬生巻へと継がれていく末摘花という女君の話の経緯の原型になっているとも論じている。さらに夕顔の物語についても、それが白狐の化けた美女の話「任氏伝」をとりこんでいるだけに、彼女の一面には一人の男に尽くす

貞女の面影が宿っていると。これら短編的な女君の造型は、単なる作者の女性観や見聞体験にもとづいていてのではないことになる。

もとより平安朝の文人たちは、さまざまな外来の漢詩文に刺激されながら、しばしば、もう一つの世界を思い描いた。彼らの詩文には、特に『桃花源記』や『遊仙窟』などに影響され、北山あたりの山中の寺院や洛中の上皇御所・貴族邸を仙境と見立てた表現がみられるという。そのような風潮のなかで、若紫巻における源氏の北山行の場面全体が桃源郷の世界を志向している、と本書は指摘する。さらに、そこで噂される明石の地ももう一つの仙境のように思い描かれていて、それだけに後に明石の物語へと語り継がれていくはずだとしている。あるいは、胡蝶巻あたりの六条院もまた、仙境のような世界と見られていると論ずるのである。

*

これまでみてきたように本書では、中国的なるものが『源氏物語』の内にどれほど深くくいこんでいるかを、縦横に分析している。しかもその分析が個々の引用のしかたに柔軟に應ずるべく工夫されているところから、説得力のある論旨を展開することになる。しかしこの問題の行く先は、海彼的なるものをとりこむことが逆に日本的なるものを、あるいはより普遍的なるものをどのよう達成しえたか、という次元の課題に連なっていくべきではな

いか。その勘どころに田中氏自身が最も自覚的であったことは、本書の随所にうかがわれる。それだけに、氏の早すぎる死をあらためて惜しまざるをえないのである。というよりも、そうした根源的な本質の問題を、後進のわれわれが、この田中氏の業績を引き受けながら、ともに考えつづけていくべきだと思う。

また田中氏は、中国・韓国など外国の多くの若い学究を育成して、しかも氏自身そこから多くを吸収してきた。その一端は付録の「北京日本学事情」の章からも察せられるであろう。これは氏が北京日本学研究所で平安朝文学を講じた時期の日録である。田中氏は、この著書名が示すように、研究と教育の両面にわたって、まさに「交流する平安朝文学」の研究者であった。ちなみに、本書よりも二か月ほど前に発刊された『交錯する古代』（二〇〇四年刊 勉誠出版）は、氏の交流してきた中国・韓国を中心とする国際的な研究者による、二十四編の論文を集成したものである。この一書だけを見ても、田中氏がいかに国際的な研究と教育に力を注いできたかが明らかである。これからの日本文学研究がいよいよ国際的な交流を盛んにさせていくであろうと思われるだけに、この田中氏の一連の業績を永く記憶にとどめたいと思うのである。

（二〇〇四年三月 勉誠出版 A5判 五三三頁 税込一五七五〇円）